



長浜御坊大通寺

長浜市曳山博物館

館長 西川 丈雄

はじめに

長浜別院大通寺（真宗大谷派）は、「御坊さん」と湖北長浜の人々から親しみをもって呼ばれ、3月と9月の彼岸法要、7月の夏中法要、10月の報恩講などには、多くの参拝客でにぎわってきました。

大通寺は江戸時代の長浜町域を引き継ぐ長浜の市街地の東北の一角にあって、周囲を塀に囲まれています。平成になって、アーケードが外され、町なみが整備された「ながはま御坊表参道」商店街の突き当たりに二重の屋根を持つ大きな山門があります。

山門をくぐると大きな広場があり、それを囲むように国や滋賀県、長浜市指定の諸建築、本堂、広間、庫裏、太鼓楼、鐘楼などの建物と門徒が集まる建物が立ち並び、また、含山軒や蘭亭の庭園などもあります。

真宗寺院と門徒のつながりもよく示す長浜御坊大通寺は、長浜の文化財の一大宝庫であり、地域の人々が誇りとして大切に思っている地域文化財でもあります。ここでは、大通寺の始まりや建物群を中心に見ていくことにしましょう。

大通寺のはじまり

大通寺のはじまりについては、詳しくはわかりませんが、戦国時代に織田信長に対抗した本願寺の湖北門徒たちが集会をする場所となった「総会所」が始まりといわれています。慶長年間（1596～1615）には、本願寺の教如と強く関係した湖北・長浜の門徒や僧侶たちが、その総会所を長浜旧城内に設け、「長浜御堂」といいました。長浜御堂は、長浜城



長浜御坊大通寺門前

内外に場所を変えたことはありませんが、現在の地の西南付近の石田屋敷跡に移転し、慶安2年（1649）には、領主の井伊氏から現在の大きさの境内を寄付されました。

現在の地に移ったときのことを、後にまとめられた「大通寺史」には、元和元年（1615）に長浜城が壊され長浜の町が城下町の機能を失い町が衰微したため、町筋の回復のため旧長浜城内にあった長浜御堂を、町年寄や門徒などが計画して移したということが記されています。

この長浜御堂の移転によって、長浜の町が今度は城下町から大通寺の門前町として発展することになりました。さらに、湖北の門徒や僧の熱望によって長浜御坊の創建と連枝（門主の血縁者）の住職就任が認められ、長浜御坊大通寺となりました。そうして、大通寺は湖北地域の真宗門徒や僧侶のよりどころとして発展し、門徒の参集が行事ごとに行われるなど、町もともににぎわっていきました。

江戸時代後期の記録を見ると長浜町には戸数1080軒の半数にあたる526軒が「御坊軒」役をつとめ、誘致した大通寺の維持にかか

わっていたことがわかります。また、湖北三郡（伊香・浅井・坂田）の5000戸の門徒からも打銀として大通寺の維持のためにお金が入納されました。

「お花狐」の伝説

この大通寺が現在の地に建てられたことにまつわるお話ですが、「お花狐」の話として伝えられています。それは次のようなお話です。

長浜御堂の再建の話が起こったとき、もともとあった長浜城内派と新たに宮村の石田屋敷移転派とが争ってなかなか場所が決まりませんでした。そこで両派の代表が、京都の本山へ行って決めてもらうことになりました。

一足先に出発した長浜城内派が、野洲川に来ると大夕立で川が渡れず進めないで、川が渡れるまで、堤防にある一軒の茶店で休息することになりました。その店の女中さんが心地よくもてなしてくれました。名を聞くと「おはな」と答えました。やっと川が渡れるようになって京都へ着くと、すでに後から出発したはずの宮村移転派が本山から許可を得て帰るところでした。

ともに京都から長浜へと帰る途中、野洲川まで来ると茶店はなく、「おはな」もいませ

んでした。これは石田屋敷に住む老狐「おはな」が、石田屋敷に長浜御堂を移転して欲しかったためだろうといわれています。

その「おはな」さんは、以後長浜御坊を火災からまもっているといわれています。

このお花狐にまつわる話は、このほかにいくつもお話が伝えられ、大通寺と狐にまつわる民話として絵本にもなったりしています。

大通寺の建造物群の特徴

大通寺の敷地は、江戸時代の長浜町の東北隅にあつて南を正面にして東西約131メートル、南北約175メートルの長方形の形をしています。

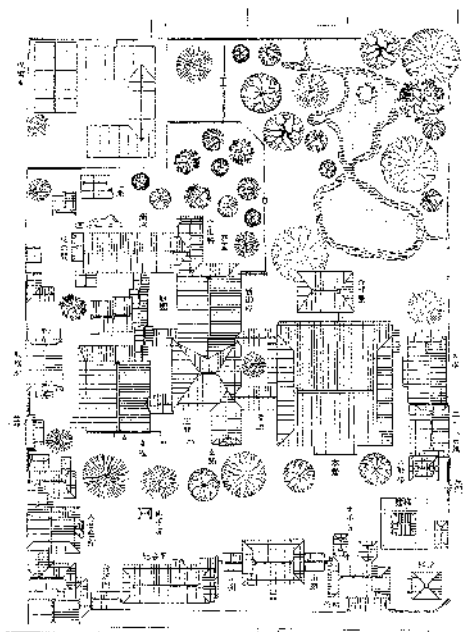
この敷地の、南面には、ほぼ中央に山門（大門）があつて、その東側には茶所と宝蔵が、西側には総会所や台所門があります。東面には南から鐘楼・太鼓楼・東門・二十八日講と因講の建物がつづき、西面には南から大谷会館、西門、教務所が続き、奥に長浜市立大谷保育園があり、背面の北側は、塀となっています。中央南より東から本堂・大広間・庫裏がつながり、広間の後ろには、新御座、含山軒・蘭亭・桜の間が続き、庫裏の裏からは桜の間につながっています。

また本堂の背後の北側には御裏庭園があり、この御裏の庭園は大通寺の協力を得て、これまでの庭園を活かした市民が憩える公園として整備工事が現在進められています。また大通寺の客室となっています蘭亭や含山軒にはそれぞれ名勝の庭園が設けられています。

大通寺の建造物群は、真宗寺院の特徴と江戸時代から昭和までに建築された建物がよく残り、真宗寺院と門徒とのかかわりの中で機能してきた建造物の様子をよく伝えています。

本堂

本堂は、重要文化財に指定されていて、大規模な真宗寺院の本堂の典型的な建築です。南向きの仏堂は正面（桁行）27.7メートル、側面（梁間）25.1メートルの大きな本堂で、屋根は入母屋造り、本瓦葺きとなっています。伏見城の遺構と伝えられていますが、初代住



大通寺境内（『長浜市史』第7巻より）

職靈瑞院れいずいじんにより明暦3年（1657）に新築されたと考えられています。正面と東西三面にはひろえん おちえん広縁と落縁が囲み、内部は本尊を安置する内陣ないじんと礼拝する外陣げじんとに大きく分かれています。

広間

広間は、大通寺最古の桃山時代の建物で、重要文化財に指定されています。東にある本堂とは渡廊わたろうによって結ばれています。南を正面にして正面（桁行）21.9メートル、側面（梁間）20.9メートルの大きな建物で、屋根は寄棟造り、本瓦葺よせむねとなっていますが、周囲はさんがわらぶ棧瓦葺きとなっています。元は伏見城にあつた建物が本願寺に移され、さらに承応年間（1652～55）に大通寺に移されたと伝えられています。この広間に付けられた玄関の部分は、宝暦10年（1760）に第五代住職横超院おうちょういんとついで来た井伊家の数姫かずひめ（嘉寿姫）によって寄付されたもので、ぐんかく「群鶴図」おいまつ「老松図」かのうなどの狩野派の襖絵があります。広間の内部は対面所形式の書院で、奥の方が一段高く上段の間になっており、正面に中央に大床、左に違い棚と書院の座敷飾り、右に帳台構と一列に配置され、それぞれ狩野派の絵師による「滝に牡丹唐獅子図」や「飛燕図」などの障壁画が描かれています。

新御座

新御座は、広間の北側（背面）にある建物で南面し、正面（梁間）15.9メートル、側面（桁行）22.9メートルの大きな書院造りの建物です。この建物は、天明7年（1787）に彦根藩主井伊直中なおなかの弟で大通寺第6代住職となった明達院みょうだついんが入寺するときに井伊家からの寄付によって建てられたと伝えられています。その後大正元年（1912）に大改修されました。内部は、東側が大きな広間となっていて、上段・下段にわかれています。上段の間は格天井ごうてんじょうとなっていて、大床と違い棚、付書院、帳台構ちようだいがまえには狩野永岳えいごくが描いたといわれる障壁画があります。下段の間には、岸駒がんくによって金地に墨で描かれた雄大な老梅のふすま絵があり、この建物の特色となっています。また



大通寺本堂と修理中の太鼓楼覆屋

西側の鶴・枯木・雀・山水・蘇鉄そてつの各部屋にはその名称のもとになった襖絵があり、いずれも中川雲屏うんべいによって描かれたものです。

含山軒・蘭亭と庭園

新御座の北側には、重要文化財の大通寺の客室・含山軒と蘭亭そして名勝の庭園があります。その位置は、東に含山軒の南北棟があって、その西に接して東西棟の蘭亭が続いています。いずれも江戸時代の前期・中期を代表する滋賀県下にある小規模な数寄屋建築すきやのなかでも価値が高い建物です。

含山軒は、明暦から延宝期（1655～81）ころの建築と推定されています。東側の二室が主室で、一の間には狩野山楽さんらくの描いたという「山水図」、二の間には山雪が描いたという「枯木鳩図かれきにはとず」の障壁画があります。また、奥の一の間からは、庭園に借景として取り入れられた伊吹山が望めます。このことから第五代住職の横超院が「含山軒」と名づけ、自らも「含山」と号しています。

この含山軒庭園は、江戸時代前期の枯山水で、縁側に近い部分を広く砂地として池に見立て、池の中央に石を積んで島を作り石橋をかけています。左手置くには立石を組んで滝として豪壮にし、島の石組みはすべて横にして静かな様子を表しています。背景の木々の間に富士山のような形状の伊吹山を取り入れています。

蘭亭は、宝暦5年（1755）の建築で、南を正面とし、その一の間、二の間にかけては、まるやまおうきよまるやまおうきよが描いたと伝わる「蘭亭曲水図らんていきよくすい」の障壁画が襖や障子の腰襖、床などに描かれて



大通寺大広間・庫裏・新御座をのぞむ

います。その南には、蘭亭庭園が箱庭のようなところに設けられています。左手奥に豪壮な立石を立てて枯れ滝をあらわし、手前の枯れ池に流れ込む枯山水の庭園になっています。

これらの庭園のほか含山軒庭園の北側には長浜市指定文化財の学問所庭園があります。

庫裏・台所門

庫裏は、長浜市指定文化財で、南を正面にして、正面（梁間）16.3メートル、側面（桁行）16メートルの大きな建物で、切妻造りの妻面を正面としています。この庫裏は、大通寺の台所の役割をもつ生活の場ともいべき建物として、天和2年（1682）に建築されました。玄関を入ると大きな土間があり、その奥は板敷き、その奥に畳敷きの部屋があるという構成になっています。

この台所の入り口の門が、台所門となります。現在の門は、薬医門という形式です。この門についていた扉の金具の銘文に「天正十六年」とあること、土佐山内家の文書に天正17年のところに御門作料支払いの記述があることなどから長浜城の城門と推定されています。現在の大門（山門）ができるまでは、この門が大門のところにあってその役割を果たしていました。

山門（大門）

大通寺の正面入り口を占める樺材を用いた大建築で、本堂を始めとする建築群や寺の景観などともよく調和しています。長浜市指定文化財となっている山門は南を正面とする大型の二重門で、左右に山廊といわれる附属

建物があり、そこから二階へあがる階段があります。文化5年（1808）年に起工されて、大通寺の仏事や法要などの事情もあって、天保12年（1841）の完成式まで33年を費しました。

山門の2階には、釈迦如来、弥勒菩薩、阿難尊者の三尊像が安置され、天井には大塚（山懸）岐鳳による「天女奏楽図」が描かれています。一階の木彫は早瀬守次によるもので、いずれも長浜居住の絵師・彫物師がその腕を発揮したものです。

鐘楼・宝蔵（経堂）・太鼓楼

これらはいずれも長浜市指定文化財です。鐘楼は、方形の蓮池の中に設けられています。椀皮葺、入母屋造りの屋根を持ち、その下に大きな釣鐘を吊るしています。延宝3年（1675）に建築されたものです。

鐘楼の傍に宝蔵があります。宝形造りで大壁の土蔵造りとなっており、壁には虫籠窓を設けています。明和2年（1765）に建築されました。

太鼓楼は、本堂の東側にあり、二階建てで、2階部分に太鼓が吊るされ、行事のときに打ち鳴らされる。平成19年度から保存のための修理が始まりました。

終わりに

このほか、近代建築の大谷会館や御手洗舎や講場、教務所などの建物が並び立っています。これらの建物の保存のため、大通寺では十年計画で太鼓楼を手始めに、台所門、山門、本堂などの修理が行われることになり、計画的に進められていきます。長浜御坊の特色ある景観が伝えられることは、多くの人々の支援も必要となりますが、後世に伝えられていく手立てがされたことは大変うれしいことです。

滋賀文化財教室シリーズ No.226号

発行年月日 2005年3月7日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大菅町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525